

実践タイトル

空港までの最適な交通手段を考え、所要時間と料金を相手に伝える



ひとこと

三豊平野の中央に位置する自然豊かな豊中町にある中学校です。ぜひ、ホームページを覗いてください。

実践者 福本 香緒里

学校名：三豊市立豊中中学校
学校所在地：香川県三豊市豊中町本山甲148番地1
TEL：0875-62-2071
URL：<https://mitoyo.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=3720003>

使用するICT機器・準備物

指導者

デジタル教材	指導者用デジタル教科書(教材)、その他(Google Classroom)
使用端末	Windows, Chrome OS
その他機器	大型モニター、その他(パワーポイント、プリント2種類)

学習者

デジタル教材	学習者用デジタル教科書・教材セット
使用端末	1人1台使用(Windows, Chrome OS)
その他機器	

学校内のICT環境、活用実態

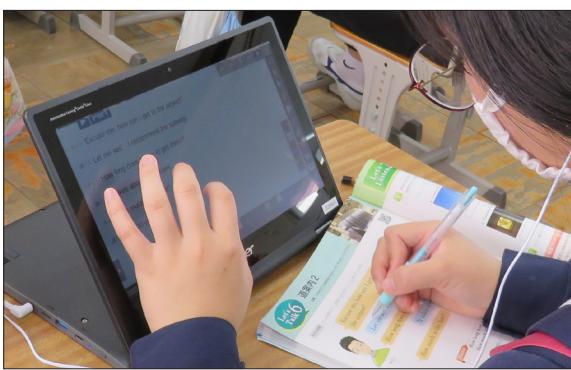
豊中中学校では、英語科の授業においてICT教育を積極的に行っている。利点は1人1台のタブレットを所有できており、クラスの生徒全員に一斉に指導が行えるため、環境が整っている。今年度から、デジタル教科書を積極的に使い、予習や復習、教科書の解説なども行っている。また、生徒によるプレゼンテーションやスピーチの際にも、タブレットを用いて個人個人が原稿や関連資料を作成したり、ペアやグループでの共有がしたりしやすいので、学習に非常に役立っている。

2021年度の新たな取り組みとして、朝学習でのQubenaによる学習を取り入れたことがある。個に応じた問題に取り組むことができ、AIが評価もするので、効果的であった。しかし、全校生徒が一斉にお

こなうことでの、サイトにつながりにくいなどの問題も生じたので、改善が必要である。

本校では、教科を問わず、ICTによる授業をおこなっている教員が多い。実際に、保健体育や音楽では、動画を撮影した後、リアルタイムで確認ができることが有効な学びにつながっている。さらに技術科の授業では、ロボットの借用により、AIと触れる機会を持ったのも効果的であった。また、デジタル機器に興味を持っている生徒が多く、先生方一人ひとりの実践がよりよい環境を作っていることにつながっているといえる。

今後も、学校全体でメディア教育に取り組み、よりよいICT教育を進めていけるように尽力していきたい。

授業の流れ	主な学習活動	▶ 教師の手立て <input checked="" type="checkbox"/> 留意点 機器・教材
導入	<p>■ 指導者用デジタル教科書のコンテンツ「本時の会話場面の動画」を、大型モニターで視聴する。</p>  <p>■ めあてを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 相手が空港に行くのに最適な交通手段を考え案内をすることができる </div> <p>■ 3分間、学習者用デジタル教科書を個人で操作しながら、問題をノートに解く。</p> <p>【問題】</p> <p>(1) ①と②に入る言葉を日本語で書く。 (①) へ行く方法として女性がチェンに勧めたのは (②) である。</p> <p>(2) 英語で何と言えばよいか考える。 ① 図書館 (the library) への行き方を尋ねたい時 ② 所要時間を尋ねたい時 ③ 運賃を尋ねたい時</p> 	<p><input checked="" type="checkbox"/> 指導者用デジタル教科書 大型モニター</p> <p>▶ チェンに通行人が道案内をしているところであることを伝える。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 問題を解くために必要な情報量や内容は、生徒の習熟度によって異なると考えられる。そのため、用いるコンテンツは生徒各自で判断させる。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 問題の内容について、難易度は学習者集団の習熟度に合わせること、新出単語・重要表現・本文の内容をどの程度理解できているか教師が確認できるような問い合わせにすることに留意して設定する。</p> <p>▶ 問題を解くのに困っている生徒には、デジタル教科書のどのコンテンツを使えばヒントを得られるか助言する。</p>
	<p>■ 7分間、学習者用デジタル教科書を個人で操作し、本文の音読練習を行う。</p> 	<p>学習者用デジタル教科書</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 目的意識をもって音読に取り組めるように、7分後「再生機能:Shadowing IN, 音声速度:Normal, 再生間隔:0s」でシャドーイングを行うことを伝え、実際に流す。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 紙の教科書にメモをしてもよいことを伝える。</p>

授業の流れ	主な学習活動	▶教師の手立て <input checked="" type="checkbox"/> 留意点 機器・教材
	<ul style="list-style-type: none"> ■指導者用デジタル教科書のコンテンツ「Text」をモデルとして、シャドーイングを行う。 ■ここまで活動について、自分が使用したコンテンツとその活用方法を振り返り、記述する。 ■記述した内容を班で共有する。 	<p>▶ 練習時間とシャドーイング時に流すモデル文の再生条件は、学習集団の習熟度に応じて設定する。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 次回以降同様の活動を行うときの手立てとして記録させる。</p>
展開	<ul style="list-style-type: none"> ■「I recommend the subway.」というセリフについて、班で、通行人が駅に地下鉄を勧めた理由を想像する。 ■大型モニターに映された人物を見て、自分が通行人だと想定し、勧める手段とその理由を考え、プリントに記述する。 <ul style="list-style-type: none"> ①急いでいる様子のスーツを着た男性（下図） ②ドレスアップした老婦人 ③黒服にスキンヘッドの外国人 	<p>指導者用デジタル教科書</p> <p>大型モニター</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 指導者用デジタル教科書の中で「I recommend the subway.」というセリフを拡大し、大型モニターに表示する。</p> <p>▶ 必要であれば、3つの交通手段（バス・地下鉄・タクシー）の特徴を整理する。</p> <p>大型モニター</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> パワーポイントで3人のイラストを提示する。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ■次時の活動の説明を聞き（ペアで、3人の人物から1人を選ぶ。その人と通行人に別れて道案内の場面を演じる）、学習者用デジタル教科書をペアとともに操作しながら練習を行う。 	<p>学習者用デジタル教科書</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 次のこと伝えれる。</p> <p>①班の中で発表会をして、コメントをもらい合うこと（もらったコメントをポイントとしてさらに練習をする）</p> <p>②役が伝わるかどうか、発音やイントネーションに気を付けてセリフを言うことができているかを評価すること（デジタル教科書の活用を暗示する）</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ■振り返りと、次時の目標を記述する。 	

生徒の反応、実践の手ごたえ

生徒の反応について、①主観的な側面（生徒自身が記述したこと）と、②客観的な側面（私が感じた変化）から考える。

① 主観的な側面

学習者用デジタル教科書を導入した初回の授業で、使った感想を記述させた。多くの生徒が、自分のレベルや目標に合わせて設定ができる利点だと感じたり、マスキング機能やリピート機能で暗記がしやすいと感じたりしたことがうかがえる。該当する生徒の感想を、一部紹介する。

自分に合った設定ができるについて記述した生徒

- ・繰り返し聞きたい時や速さを調節したい時に自分で設定できるのがいいと思った。
- ・様々な種類の練習方法を試すことができておもしろいと思いました。
- ・自分のできない所、やりにくい発音を中心に何度もできるので良いと思いました。

覚えやすさについて記述した生徒

- ・正しい読み方が自分の耳でしっかりと聞けるので覚えやすいと思いました。
- ・何度も繰り返し聞けてわかりやすかったです。
- ・何度も聞けて発音を覚えることができました。
- ・単語の意味がいつもよりも早く覚えることができて便利でした。
本文もどこで切って読むべきなのがわかりやすくて使いやすかったです。
- ・（本文を再生するときに）単語を読んでいるところに色がつくように設定できるようにできるのがよかったです。意味もつけることができるので練習しやすかったです。

② 客観的な側面

学習者用デジタル教科書導入後の生徒の変化として、顕著なのは、音声に対する意識と技能の向上である。Speakingにおける正確さを率先して習得しようという姿勢が顕著になった。イヤホンを通して自分に合った設定で音声を聞きながら、自発的にリピートをする様子や、紙の教科書に発音やイントネーション、ポーズの位置を書きこむ様子がよく見られる。それに伴い、例えば“dishwasher”の /ə/ 音に気が付く（「ウォ、シュ…ア？アって言ってる？」とつぶやく様子）など、音声技能が向上しているのを感じた。

今後の課題・展望

授業実践、生徒の反応、本時の観察者によるフィードバックをもとに、今後デジタル教科書を用いた授業を継続していく上の課題と展望を述べる。

① 授業スタイル

「教師が教え、生徒は知る」というトップダウンのスタイルに、「生徒は学び、教師はそれを確認する」「生徒と教師がともに学ぶ」というスタイルが入ってくるのを感じた。デジタル教科書を用いた授業を重ねるたびに、生徒たちはどんどん新しい機能を見付け、共有し、自分なりの学び方を探求している。トップダウンの場面も生徒の自主性に委ねる場面も、教育にはどちらも大切だと思っている。それぞれの特長を取り入れながら、自分なりの授業スタイルを、また探っていきたい。

② 評価方法

①のような変化の中で、教師は生徒の理解の確認・評価方法を考えていくことが大切だと感じた。デジタル教科書は、ネイティブの発音を、生徒が最も習得しやすい方法でインプットさせることができる。それによって生徒たちが習得する力は、私たち英語教師が想像している以上のものかもしれない。私のように日本語を母語とする英語教師は、どのような側面を、何をもって確認・評価するのがよいのか、何をどう評価できるのか。これから自分の課題として考えていきたい。

終わりに

デジタル教科書を授業に取り入れることになり、最初は本当に困惑した。機械に対する苦手意識は強い。デジタル教科書を取り入れるために、今までの自分のやり方を変えるというのは、目的と手段がすり替わっているのではないかと感じたこともあった。でもだからこそ、デジタル教科書特有の利点、チョークと黒板、紙の教科書ではできないことを、生徒と一緒に探求し、最大限に授業に取り入れたいと思った。

実践は、デジタル教科書を実際に操作することから始まった。「苦手なことは、考えるほどに苦手意識がふくらむ。とにかくやって

みよう。やるしかない。」と自分に言い聞かせた。体と感覚で覚えながら、頭で整理をしていく作業の連続だった。大変ではあったが、生徒と一緒に新たな活用法を見つけ、生徒のよい変化を目の当たりにする時間は、純粋に楽しかった。ありがたかったのは、周囲の先生方の存在だった。大型モニターの操作に困った時や授業の流れを整理したい時、手を貸してくださる先生方がいた。暇な時期などないこの仕事で、ご自身の時間を割いて助けてくださった先生方に、厚く感謝を伝えるとともに、今回の課題に取り掛かりたいと思っている。